
輝く未来

Tomiono

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輝く未来

【ZPDF】

Z6557E

【作者名】

Tomiono

【あらすじ】

事情が事情で、実家の八百屋を手伝っている孝弘。未来には不安だらけだが・・・ある女性が帰郷し、孝弘に出来うことで孝弘は大きく変わつてゆく！

(前書き)

なんつーか、これもまた友達に出し合った小説の課題の一つです。作成期間はおよそ一ヶ月。まあ、一ヶ月で書いたにしてはまあそれなりの出来ですが、ちょっと変な点もあります。あまり気にせず気楽に読んでください。

電話は、四、五回鳴つて止まつた。部屋に突然、大柄の若者が入つてきた。

「あーちくしょー! また切れやがった!」
男は急いでかけなおした。

「ほんとで、歌謡曲の匂ひで、隠密な声が響いた

おー
芝 強 加 何 て な が て な が か ん か

「いや、かくしてお客の心のせ間諳に着き送られ

かにかく、やがてはいよいよ、その運命の日が来た。

「そういうなよ。俺だって好きで『こんな』ことをやつてゐるわけじゃな

しんたから
不況の所為で倒産しながらた
今頃俺は卒業と共に

「確かこのあの倒産は導火線となりましたシ」シカドヒトが。それで、

何だつけ？ そのショックで仕事も探さず今は実家の八百屋の手伝

卷之三

「笑つてない、笑つてない」

・・・・・あ、誰か買い物に来た！ ちよことまた後でな、力

三

孝弘は電話を切って、店の外に出る。そして、そこにいる人を見て少し止まる。店で野菜を見ていたのは、とてもない美人だ。白いワンピースの上に黄色いカーディガンを着ていて、その美しさに村本の声は裏返つた。

孝弘は喋つたあとすぐに自分の声に恥ずかしくなった。

その綺麗な女性は、自分の田の前に立つている大柄のエプロン姿の青年の、体に合わなく高く裏返つた声に驚き、手を口に当てて綺麗な声で笑つた。

「じゃあ、この茄子とほれん草を・・・・・あと・・・・・と、その女性は言つた。

ずっと女性に視線を向け、見とれていた孝弘はようやく言つ。

「はい、ほ・・・・・ほれん草ですね！あと茄子！今の季節の茄子は美味しいですよ！これなんか・・・・・ほり、凄く美味しいですよ！」

そして、野菜を沢山買った女性は、そのまま歩いて帰る。孝弘の視線はずつと後姿に釘付けで、しばらくそのままであった。三月の初めの頃であった。

「今日、何だかすごい美人が買い物に来たぞ！」

と、孝弘は夕飯の時、沢山御飯を豪華に豪快に言つた。

孝弘の母は孝弘を見て言つ。

「あんたがそんなことを言うなんて珍しいね。それは・・・・・あのー、お父さん、誰だけ、あのこの前里帰りしてきた子の名前は・・・・・」

「神田・・・・・とかなんとかじやなかつたかなあと、孝弘の父はちょっとと考えてから言つ。

「お父さん、それをいうなら神崎だよ！確か、神崎愛ちゃん！」

あそここの神崎のお宅に帰省してゐんだよ。東京大学の医学部を卒業して看護婦なんだっけ？」

と、孝弘の母は言つ。

孝弘は御飯をのじに詰まらせゐ。

「げつ！東京大学の医学部！？」

孝弘のお母さんは言つ。

「そりや、頭良い子なのはあの美人から見れば分かるでしょー！」

「いや、お母さん・・・・・それはちょっと違うんじや・・・・・

・

孝弘は笑いながら言つ。

「分かるのよ、美人は頭良いって！ 私もそつだつたからね。ね、お父さん！」

と、孝弘のお母さんはお父さんに向かつて喋つた。

「ん・・・・・・どうだつたかなあ」

と、孝弘のお父さんは答えに困つて言つ。

夕飯が終わると、孝弘は一輝に電話で神崎さんのことを伝えたが、一輝はつまらなそうにしていたので孝弘は電話を切つた。

それから一週間ほどが経つ。

「んで？ その神崎なんとかさんは仲良くなれたのか？」

と、一輝は電話越しに聞いた。

孝弘は言つ。

「いや、わからないんだ、それが。毎日野菜を買ひに来てくれるんだが・・・・・・」

「それで、その度に話せるのか？」

「まあ、それは普通そんな美人がいたら世間話の一つか二つはあるだろよ」

「・・・・・一応、脈はあるんじゃないか？ 少なくとも、嫌われてはないぞ」

「なんでだ？」

「そりや、毎日買ひに来てくれるし、その度ちゃんと話してくれるんだつたら、少なくとも嫌われてはないよな。孝弘もそれぐらい見抜けよ」

「何？ 一輝、お前俺にそんな言外のことを見抜けと？」

「あ・・・・・いや、なんでもない。孝弘には無理だつた。鈍いから」

「なんだと！ お前だつて・・・・・・鋭いじやねえか！」

「褒めてどうするんだよ」

「あーもうわからんねえちくしょつ！ 切るぞー。」

次の日、離している間、少しだけ神崎さんの頬が赤らんだように見えたが、孝弘はそれはその日が春にしては暑いからだと思った。実際、孝弘自信は汗だくだつたのである。

そして、一日の終わりに、売れなかつた野菜を孝弘は母に見せた。

「今日も売れなかつた野菜がこんなにあつたよ」

「まあ、明日にでも売れるといいけどね」

と、孝弘の母は言った。

「でも、あのかぼちゃなんか店晒しなんじやないの？ もうとつくなかぼちゃの季節なんか過ぎてるぜ・・・・・・」

母は、孝弘の方を見て、鼻で笑つた。

「孝弘、あんだがせいぜい店晒しにならないよつにしな。あの神崎さんなんかいいんじやない？ 今度プロポーズしてみれば？ 案外オッケーしてくれるかもよ、あんたはウドの大木だけど気が効くからね。男は顔じやないよ！」

孝弘はこいついう意地悪なときの自分の母が嫌いだった。

その次の日、神崎さんがいつものように買い物をしにきて、野菜を選びながら楽しく孝弘と喋つていると、店に背が高い、ひょろつとした金髪の美男が入ってきた。その男は春なのに黒いコートを着ていた。その男は神崎さんと話し始めた。

「探したよ、愛ちゃん・・・・・なんでこんな所にいるんだ？」

「白石さん・・・・・あなたこそ何でここに？」

「探したんだよ・・・・・今日じゃ、僕のプロポーズの返事、聞かせてもらつよ」

孝弘はこのとき、「なぬ？ 神崎さんを愛ちゃんだと？ 何だ

こいつ！ 凳つてやりてえ！」と思つていたが、やめた。

「言つてるでしょ、あなたは友達以上には思えないの・・・・・・

「なぜなんだ、教えてくれ、愛ちゃん、僕の何処がいけないんだ？」

「それはあなたは天才的な医者で、若くして院長で、おまけにハンサムだけど、でも……」

孝弘は並べ立てられる良い点についてただ「すげーなー」と思つぽか無かつた。

白石という男は強く言つ。

「僕の未来に不安があるんだつたら、全部取り除いて、きっと君を幸せにしてみせる!」

孝弘は、自分の未来は不安だらけだと思つた。

「お願いだ! 教えてくれ!」

「ここの孝弘が割つて入つた。

「ちょっと、そこの……ハンサムな方。喋りたくないって言つてるんじゃないから、それでいいんじゃないですか?」

白石は言つ。

「君に何の関係があるんだ!」

神崎さんは、孝弘の方をチラシと見た。孝弘はびきつとなつた。

「私……実は好きな人がいるの……」

と、神崎さんはやつと言つた。

白石はうつむいて黙り込む。

孝弘は、

「まさか、俺!？」と考へてゐるのであつた。

白石は顔を上げて言つた。

「じゃあ、それが誰なのか言つてくれ。正々堂々と勝負して手を手に入れたい」

孝弘は、

「こいつどこまでカッコいいんだ……」と考へていた。

そのとき、神崎さんはゆっくりと指を上げ、孝弘を指し、

「この人」と言つた。

孝弘は思つた。「ギャーッ!」

白石は孝弘の腕を掴んで、店の裏にある河原の土手に連れて行つた。そして、成り行きでそこで殴り合いとなつた。白石は長身もあつ

て、外見に似合わない力で大学ではラグビー部だった孝弘と互角の闘いをしていた。

神崎さんは言葉を出すことも出来ずに、いつ喋ればいいのかも、どっちを応援してももう一人に悪いだらうと思いながら、ハラハラしながら見ていた。

しかし、やつとのことで孝弘は白石をまともに一発殴り、その代わり同時に白石に腹を凄い力で蹴られた。

二人は河原の土手に横たわり、お互に引き分けだと認識し、起き上がつて握手をした。かくして二人は友達になつたのである。神崎さんはどうすればいいのか迷っていた。

白石は、清清しい顔をして、孝弘の手をもう一度握った。

「今回は引き分けてしまったけど、いつか愛ちゃんを勝ち取つて見せるよ」

そのとき、別の女性が一人の前に出てきた。その女性はショートな黒髪が似合う、中背中肉の美人だつた。

「真一！ この女たらし！ 何が『愛ちゃんを勝ち取つて見せる』よ！ 許婚のあたしは放つたままかい！」

「うわっ、由香！ 何でここに…？」

「ゴメンね、愛ちゃん。真一はどうしようもなくて…・・・・・ 真

一一！ 今日という今日は許さないわよ！」

そういう、由香という人は白石に向かつて飛び掛つたが、白石もそこに突つ立つているはずもなく、走り出した。

土手を走る一人を見ながら、孝弘は神崎さんに話しかけた。

「いや・・・・・・あ・・・・・・あの、さ、さつきのが嘘でも構わないんですけど・・・・・今度僕とお・・・・・お・・・・・お食事でもど・・・・・どうですか・・・・・・・・？」

神崎さんは驚いたような顔をして、喜んでと返事をした。

孝弘は空に向かつて叫んだ。

「やつたぜーっ！」

孝弘は、また職を探すか、大学に戻るかする気力が湧いてきた。そ

のとき、自分の前に果てしなく広がる未来が見えた。そして、その
未来が輝くのも。

(後書き)

今回の課題は「恋愛小説」！　ところが、僕はちょっととまどつたんですね。辞書からひいた、入れなければならぬキーワードも店晒し、未来、そして意外でしたからね。まあ、注意点、アドバイス、駄目出しなどがあつたら気軽に言つてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6557e/>

輝く未来

2011年1月27日00時48分発行